

られた時の笑顔さえ、私が私である証拠だったのです。その原点である旅行を通して、多くの方々に、この幸せを呼ぶ魔法を拡散できたら最高だと思います。夢を実現するためには、大変

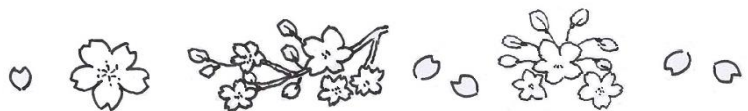
なことがたくさんあります。しかしどんな時も、その困難に笑顔で魔法をかけ、幸せを掴み取ります。

これは、加藤悠汰さんが高校2年の時に開催された「生活体験発表大会」で発表したもので、県大会で優勝しました。そして3年時には優勝しました。

彼は某高校中退後、フォーラムに相談に来ました。その後、太田フレックス高校に入学し、今年3月に卒業しましたが、相談に来た時以来久しぶりに出会った彼は、別人のように自信に満ちた青年になっていました。加藤さんの成長する力とフレックス高校の「教育力」に改めて感動です。（伊田志保・瀧口典子記）



教育相談部会報告



3月28日、親子連れが前橋公園の満開の桜を楽しむ中、フォーラムでは教育相談部会が開かれました。学習支援の取り組みとスクールカウンセラーの仕事について報告します。

学習支援活動

さまざまな相談を受ける中で学習支援は継続的に行われてきました。3年前に始まった「母親」への高卒認定試験受験への支援は新型コロナウイルスの爆発的な拡大を機に中断を余儀なくされました。コロナ禍は育児に追われる環境で学習を始めようとするお母さんにも大きな影響を与えました。

外国人への教育支援に取り組むNPO法人Gコミュニティーの要請を受けて昨年8月から始まった女性の高校受験のための学習支援にはフォーラムから二人が参加しました。日本に来てから8ヶ月の17歳の女性は日本語学習の支援を受けてきましたが日常会話の力は十分とは言えません。母国バングラデシュで学んだ数学や英語の力もまた日本の高校受験に対応するには足りません。そんな中で倉林が英語を、船橋が数学を担当し、手探りでコミュニケーションを深めながら週に1回ずつの支援をつづけてきました。3月、女性の努力が報われ、自転車を通える定時制高校に合格しました。いっしょに市役所に行って、学校に提出する住民票を発行してもらいましたが、その時の日本語は堂々としていました。

しかし彼女にとって、高校の授業に適應することはさらに大きな試練になります。私たちの支援はこれからも続きます。

スクールカウンセラーの仕事

教員を退職後、臨床心理士の資格を取得してスクールカウンセラーとして活動している小林一郎さんにお話を聞きました。

県内の小中学校、大学など6つの現場で仕事をされている小林さんは児童生徒、大学生と向き合って、主に不登校の悩みに耳を傾けています。私たちは、小林さんがどんなアドバイスをするのが気になりますが、「基本的には本人が自分で進むべき道を見いだすことを支援する」のが仕事だと言います。そのためにさまざまな取り組みを試みるとのこと。「傾聴」の姿勢は特に大切に、この言葉には想像以上の意味がありそうです。「なぜ」「どうして」と尋ねがちな私たちには重く響く言葉でした。得意なピアノ演奏がその扉を開くこともあると笑顔で語りました。また、本人をとりまくさまざまな環境に着目し、広い視野で問題をとらえることの必要性も強調しました。

《文責：倉林 順一》